

司馬遼太郎のアジア観

—「自國中心史觀」の克服と比較文明学的な視野の獲得

高橋誠一郎

はじめに

日本軍が真珠湾を攻撃した翌年に、司馬遼太郎は大阪外国语学校の蒙古語学部に入学した。『坂の上の雲』（1968～72年）の終了後に書かれた『モンゴル紀行』（1973～74年）の次のような文章は、なぜ司馬が「辺境」の語学ともいえる蒙古語を選んだのかという理由をよく示していると思える。

すなわち、「古い時代の漢民族文明は、かれらの種族名を漢字にする場合、ひどい文字をつくった」とし、ケモノ扁とかムジナ扁とかであらわした種族名が多いことを指摘した司馬は、少年の頃の「夢想は、漢民族からこういう奇態な文字をかぶせられた民族を、ちょうどいまの子供が宇宙人をおもうような感じでさまざまに想像することだった」と説明している^{*1}。

ここには司馬の「辺境」に対する愛情が感じられるが、それとともに「自分の文化のみが優越しているという意識を中心にして、他民族を考えた」漢民族に対する強い反発も感じられる。しかも、司馬は『日本の朝鮮文化』において、日本人が朝鮮人に対して持つにいたった優越感の原因を、大陸と地続きという「地理的関係で中国の藩国」、つまり「属邦」となり、「儒教体制」を受け入れて「中国化」せざるを得なかった朝鮮ことなり、日本では日本海と玄界灘で隔てられていたために、中国の「文明」を受け入れつつもそれを独自な形で発展させることができたためだと説明している^{*2}。

しかも「中国文明」の影響力から脱した日本では、対外的な危機感からナショナリズムが高まった幕末においては、『日本書紀』への関心も強まり、そこに記された「三韓征伐」などの描写から、かつては「中国文明」を伝えた朝鮮を日本よりも劣る「藩国」と見なす傾向が強まり、それは近代化に遅れて西欧列強による植民地化がすすんだ中国を軽視する傾向にもつながったのである。

このような朝鮮や中国に対する優越感を若き司馬も持っていたこともたしかであろう。後に詳しく見るよう『坂の上の雲』の前半においては、このような視点がまだ濃厚に残っているのである。しかし、維新後に「異民族」の「征伐」を正当化した「征韓論」があらわれたことに言及して、「明治政府というのは国民国家を標榜して、たちまちにして帝国になった」と述べて、その理論的な指導者であった福沢諭吉への疑惑を示し、「国民国家と帝国とのねじれた関係」についての議論の深化を求めた比較文明学者の梅棹忠夫は、『坂の上の雲』を「明治という国家像を非常によく描き出し」ているとして非常に高く評価している^{*3}。

実際、『坂の上の雲』を書き始めた1968年に、豊臣秀吉による「朝鮮征伐」の際に、薩摩に強制連行された朝鮮の陶工の14代目である沈寿官を主人公とした小説『故郷忘じがたく候』をも書いていた司馬は、『坂の上の雲』の終わる頃から執筆を始めた『街道をゆく』の第2巻では、「戦時中、日本政府は朝鮮人に改姓をさせ、むりやりに日本姓を名乗らせた。これほど民

族的自尊心を無視したやりかたではなく、いまなお日本に対する怨恨のひとつになって」いると記すようになっているのである⁴。

このような司馬の変化には、『坂の上の雲』を書く中で日清・日露の両戦争だけでなく、近代のさまざまな戦争が発生する仕組みと戦争の実態を凝視したことにより、世界史的な視野から地政学的な「半島国家」の問題をとおして、近代の文明観の問題をも根本的に再考察したことが大きいと思われる⁵。

『坂の上の雲』における「司馬史観」の深まりについてはいくつかの論考でも考察したが、専門外であるためにアジア諸国との関係についてはあまり深く論じてはこなかった⁶。しかし歴史教科書問題もあり、北方領土問題に加えて尖閣諸島や竹島の問題も顕在化する一方で、「グローバリゼーション」の圧力に抗する形で世界の各国でナショナリズムが高まりを見せるなかで近隣諸国との軋轢が強くなってきている現在、司馬のアジア観の変貌とその意義を明らかにすることは、焦眉の課題であるだろう。

それゆえ、本稿では比較文明学における「周辺文明論」という視点から、まず第1節で福沢諭吉の文明観と比較しながら問題点を整理し、次いで『空海の風景』、『草原の記』、『ひとびとの跫音』や対談などをも考察の対象として、「半島国家観」や「瘠我慢の説」、さらには「共栄圈の思想」の考察の深化を明らかにする。そして最後に『韁靼疾風録』の分析をとおして、司馬遼太郎が到達した新しい文明観が有する現代的な意義に迫りたい⁷。

1. 福沢諭吉の文明観と『坂の上の雲』前半のアジア観

「攘夷派」と「開国派」の激しい対立のなかで「天誅」が横行した激動の幕末を経験していた福沢諭吉は、『福翁自伝』で「此国を焦土にしても飽くまで攘夷をしなければならぬ」と主張する攘夷家を「是れこそ實に國を滅す奴等だ」と厳しく批判しているが⁸、明治維新後に書いた『學問のすゝめ』(初編1872年)においても、「天理人道に従て互の交を結び、理のためにアフリカの黒奴にも恐入り」と高らかに記した(F・III・59)。

だが、イギリスの歴史家バッブルは、バルカン半島の霸権をめぐって争われたクリミア戦争の最中に執筆され1856年に出版された『イギリス文明史』において、国家や民族の発展段階を「文明（中心）－半開（周辺）－野蛮（辺境）」と序列化し、「自國」を「文明」としながら、この「大戦争の特徴は、文明化した国家間の利益の衝突によってもたらされたのではなく、ヨーロッパで最も遅れた二つの国家の衝突によってもたらされたという点にある」と記していた⁹。このようなバッブルの著作やギゾーの『ヨーロッパ文明史』を読み込んだ福沢諭吉は、『文明論之概略』(1875年)において「文明、半開、野蛮の名称は世界の通論にして、世界人民の許す所なり」と主張するようになる(F・IV・20～21)。

この意味で興味深いのは司馬も『坂の上の雲』において、嵐で沈没したトルコの軍艦の生存者を練習艦で母国に送還することになった時に、トルコが露土戦争(1877～8年)で「ロシアと戦争し、敗北した」と教官から聞いた士官が、「アジアにあってはトルコは凋落したり。かわって日本が立つべきなり」と唱えるようになったと記していることである(I・「軍艦」)¹⁰。

さらに、司馬は小村寿太郎が「ロシアおよび英國がそれぞれ他国とむすんだ外交史をしらべ

させたところ、おどろくべきことにロシアは他国との同盟をしばしば一方的に破棄したという点で、ほとんど常習であった」が、「英國には一度もそういう例がなく、つねに同盟を誠実に履行してきている」し、ヨーロッパでは「ロシア国家の本能は掠奪である」と言っていたと、トルコやイギリスの視点からロシア帝国の「野蛮性」を強調している（Ⅲ・「外交」）。

ここには『民情一新』（1879年）において、憲法を有する大英帝国と皇帝の専制政治が続くロシア帝国と比較しながら、「我日本にても、国会を開（ひら）いて立憲の政体を立（たつ）るの必要なるは、朝野共に許す所にして、嘗（かつ）て之を非（ひ）する者あるを聞かず」（F・IV・20～21）として、イギリスの「文明性」を強調した福沢諭吉からの強い影響をみることができるだろう。

しかし、クリミア戦争におけるイギリスの立場を「文明」と規定したバッケルの文明観を『地下室の手記』（1864年）において厳しく批判したドストエフスキイは、「人間というものは、もともとシステムとか抽象的結論にはたいへん弱いもので、自分の論理を正当化するためなら、故意に真実をゆがめて、見ざる聞かざるをきめこむことも辞さないものなのだ」と記していた。そしてドストエフスキイは主人公の口をとおして、バッケルによれば人間は「文明によって穏和になり、したがって残虐さを減じて戦争もしなくなる」などと説かれているが、実際にはナポレオン（1世、および3世）たちの戦争や南北戦争では「血は川をなして流れている」ではないかと語らせて、「半開」や「野蛮」の征伐を、「文明」の理念を広める「正義の戦争」と正当化したヨーロッパ中心的な歴史観への鋭い批判を投げかけていた¹¹。実際、クリミア戦争のつい10年ほど前に中国で阿片戦争を行っていたイギリスは、クリミア戦争の直後にはインドでセポイの乱（1857～58）を徹底的に弾圧していたのである。

バッケルの歴史観を受け入れた福沢諭吉も、『通俗国權論』（1878年）では、国と国との関係は、「滅ぼす」か「滅ぼさる」かの二つに一つしかない以上、「百巻の万国公法は数門の大砲に若かず」と述べ、「一国の人心を興起して、全体を感動せしむるも方便は、外戦に若くものはなし」と結論し、「富国強兵」の必要性を強調した（F・VII・57～62）。そして「朝鮮との交際を論ず」という『時事新報』の社説では、「日本は既に文明に進て、朝鮮は尚未開なり」と断じて、「隣国の文明」を助けることは、「日本の責任」であるとともに、場合によっては朝鮮の「文明開化」を助けるために武力を用いることもやむを得ないと記したのである。

司馬も「統一国家をつくりいちはやく近代化」した日本と比較しつつ、「李王朝はすでに五百年もつづいており、その秩序は老化しきっているため、韓国自身の意思と力でみずからの運命をきりひらく能力は皆無といってよかったです」とし、1894年2月に甲午農民戦争が勃発して、「韓国の秩序をゆるがすほどのいきおい」になったことで、日清戦争が勃発することになったとした。そして日清戦争や日露戦争の勃発の原因を考察した『坂の上の雲』の前半で司馬は、19世紀という時代は「列強はたがいに国家的利己心のみでうごき世界史はいわゆる帝国主義のエネルギーでうごいている。日本という国は、そういう列強をモデルにして、この時点から二十数年前に国家として誕生した」と記した。

さらに、バルカン半島の霸権を争ったクリミア戦争（1853～56年）や露土戦争（1877～78年）だけでなく、インドシナ半島の霸権をめぐって争われた清仏戦争（1884～86年）などに言及し

つつ、地政学的な「半島国家」の視点から、「半島国家というのものは維持がむずかしい」と説明し、喉もとに突き付けられた短刀のような形をしている「朝鮮を他の強国にとられた場合、日本の防衛は成立しない」と説明したのである（II・「日清戦争」）。

こうして朝鮮半島の覇権をめぐって争われた日清戦争に勝った日本は2億両（テール）の賠償金と台湾、澎湖島、および遼東半島などの領土を清国から得たが、講和条約の調印から1週間もたたないうちにロシアがフランスやドイツと語らって、遼東半島を清国に返却するようにとの「干渉」を行い、さらその2年後にはロシアが遼東半島に軍隊を入れてここを領土とした。

この「三国干渉」の問題は後で露土戦争後の列強による「干渉」と比較をしたいが、ここで注目したいのは、この事態を『時事新報』が社説「今の外交心得は如何す可きや」で、「古来、他国の土地を取るには、多少血を流して始めて目的を達する」のが普通だが、今回は日本がその報酬を得ることができなかつたのに対し、「単に口舌の力を以て、寸兵を動かさずして、幾千里の土地を得たる」ことは、「古今の歴史にも希（ま）れなる新筆法」であると記して、「我国人たるものは、此事実を見て如何（いか）に考ふるや」と日本人に戦争への覚悟を問はずしていたことである。

このような言葉を受けるかのように、司馬も「この当時の日本人が、どれほどロシア帝国を憎んだかは、この当時にもどって生きねばわからないところがある。臥薪嘗胆は流行語ではなく、すでに時代のエネルギーにまでなっていた」と記し、「ロシアの態度には、弁護すべきところがまったくない。ロシアは日本を意識的に死へ追いつめていた」と書き、「日本側の立場は、追いつめられた者が生きる力のぎりぎりのものをふりしぶろうとした防衛戦であったこともまぎれもない」（III・「開戦へ」）と規定した。このとき司馬は、福沢諭吉とともに「理念としての平和」ではなく、「現実としての戦争」の必要性を認めていたといえよう。

そして日露戦争をバルカン半島の覇権が争われたクリミア戦争（1853～56年）と比較しつつ、これらの戦争はともに「ロシアの南下膨脹政策からおこった」のであり、「その本質は酷似している」とし、「英國がその植民地政策上、トルコに味方したこと、日露戦争に似ている」（V・「水師營」）と指摘した司馬は、バルチック艦隊が当時フランス領となっていたカムラン湾に寄港したことにふれて、インドシナ半島の覇権をめぐって争われた清仏戦争に言及しつつ、ロシアは「満州と朝鮮を獲（と）って、遅まきながら仏領ベトナムの真似をしよう」とし、その結果が日露戦争になったとした（VII・「東へ」）。

こうして司馬は日本の「その強烈な被害者意識は当然ながら帝国主義の裏がえしである」が、「この戦争は清国や朝鮮を領有しようとしておこしたものではなく、多分に受け身であった」と主張したのである。

ところで、福沢諭吉におけるアジア認識の問題を考察した安川寿之輔は、福沢諭吉によって指導された『時事新報』に掲載された社説など『福沢諭吉全集』を詳しく分析し、さらに『坂の上の雲』における歴史の記述の問題にもたびたび言及しながら、明治維新後に日本が行った戦争を、「文明」による「野蛮」の征伐として正当化した論拠のほとんどを福沢諭吉が与えていると厳しく批判した¹²。

たしかに、『時事新報』には「チャンチャン」など差別用語的な単語の使用などがみられるが、

井田進也は中江兆民の研究でえた方法を用いて文体論的な詳しい分析を行い、『福沢諭吉全集』に載っている論文のいくつかが弟子の石河幹明によって書かれていることを明らかにした^{*13}。このような井出の考察を踏まえて平山洋は、『福沢諭吉全集』を編んだ石河幹明が作為的にその中に自分の文章を割り込ませているとして、石河の責任を鋭く糾し、「天皇讃美者」、「領土拡張主義者」、「民族差別主義者」などと安川から批判された福沢諭吉のレッテルをすべて「凡庸にして時局的な」石河に帰した^{*14}。

しかし平山も記しているように、「石河が書いていた社説は、今日の目で見れば恥じるべきものであるとしても、1898年当時は特にそのようには受け取られていなかった」のであり、福沢諭吉も自分が指導する『時事新報』の社説として石河の文章を採用していたのである^{*15}。そして石河はその後、福沢の次男捨次郎によって主筆とされ、戦争へと向かう時勢の中で『時事新報』の部数の増大にも貢献したのであり、司馬遼太郎もまた『福沢諭吉全集』などによりながら、『坂の上の雲』の前半を書いていたのである。

問題の根は、福沢諭吉自身から発していると言わねばならないだろう。一方、戦争の実態を鋭く観察し続けたことによって司馬は、「昭和」という国家を著すころには福沢諭吉に対する敬愛の念は保ちつつも、「脱亜論」や「瘠我慢の説」に対するもっとも鋭い批判者となっていくのである。

2. ロシア帝国の戦争の考察と朝鮮観の変化

日露戦争に際して反戦を唱えたトルストイについては『坂の上の雲』の前半ではふれられていなかった。しかし、「日本人にとってきわめて不幸な事件」となった堅固な要塞である旅順攻撃の惨劇と、「戦いの惨烈さは、近代戦のそれを十分に予想させる」セヴァストーポリの攻防戦とを比較した司馬は、この攻防戦に下級将校として従軍していたトルストイが、「籠城の陣地で小説『セヴァストーポリ』を書き、愛國と英雄的行動についての感動をあふれさせつゝも、戦争というこの殺戮だけに価値を置く人類の巨大な衝動について痛酷なまでのろいの声をあげている」と記すようになる。そして、戦争についても司馬は、「戦争は政治がおこなう最大の罪悪であるとはいえ、その罪悪を単に罪悪にとどめず、いっそう頽廃させるのもまた政治であろう」と述べるのである。

こうして厖大な死傷者を出した近代戦争としての日露戦争の現実を「冷厳な事実」を直視して詳しく調べていくなかで司馬は、要塞都市であった旅順の攻防とクリミア戦争のセヴァストーポリの攻防との類似性に気づいたのである。さらに、「祖国戦争」(1812年)でナポレオンの率いるヨーロッパの強国フランスに対する勝利を奇跡的に収めた後では、ヨーロッパ文明に対するそれまでの劣等感の反動から「自国」を神国化する「国粹」的な思想が広がったロシアと、強国ロシアを破って日露戦争に勝利した後の「明治国家」との類似性にも気づくようになるのである。

この意味で興味深いのは、「シナに遼東をかえせ」と要求したロシア公使の背後には「極東水域におけるロシア艦隊があり」、「命令一下東京湾に侵入して砲弾の雨を東京市に降らせるだけの態勢をとっていた」と記し、ロシアが軍事力を背景にその要求を日本側に認めさせたと書

いた司馬が（II・「列強」）、日清戦争前の日本の韓国政策についても、戊辰戦争の際の「蛮勇」を買われて京城の公使として駐在していた大鳥圭介が、外国から「銃剣の威をかりて強盗のようなことをする」と批判されつつも、「一個師団」の軍事力を背景に、「強引な外交」で日本の要求を認めさせていたとも記していたのである。

さらに、属国とされた「ポーランド人」や「フィンランド人」が、言語などの「ロシア化の大波に抗してさまざまの抵抗」を示したとすでに第四巻で書いていた司馬は、属国における独立運動やロシアの革命運動を助けた情報将校明石の活躍を描いた後で、「ロシアとポーランド」は「日本と朝鮮」との関係に似ているとし、「西方のゲルマン文化を東方のロシアにうけわたす役割をした」ポーランドが、「ロシアの属領となってしまっているため、壮丁が大量に徴兵され、極東の戦線」で無意味に亡くなっているが、「朝鮮を通じて大陸文化を受容した」日本が、「いちはやく近代化した」後で、「朝鮮を隸属させようとし、げんにこの日露戦争のあと、日韓併合というものをやってしまい、両国の関係に悲惨な歴史をつくった」と批判するようになる（VI・「大諜報」）。

この意味で重要なのは、司馬がすでに日清戦争を考察する中で、他国への「侵略」は、「結局はナショナリズムを誘発し、このため一民族が他の民族の領域にふみこんで成功した例は、歴史のながい目でみればきわめてまれである。結局は報復される」ときわめて明確に記していることである（II・「列強」）。

それゆえ、日露戦争勝利の大きな一因を作った情報将校の明石元二郎を高く評価していた司馬は、「日露戦争の世界史的意義」というエッセーでは、「日露戦争後、日韓併合になって、彼が朝鮮総督府の警察政治を全部担当したときの、朝鮮の志士たちへの弾圧の仕方というものは、巧妙狡猾をきわめた。そのときの明石というのは、どう考えても、煮ても焼いても食えないという悪党です」と厳しく批判したのである^{*16}。そして、言葉を継いで司馬は「だから彼は人生において二回役がわりをしているわけですが、二回目はベリヤみたいな役になっているわけですよ」と、スターリン時代に反対者の大虐殺を行ったベリヤと比較しながら明石を論じたのである。

さらに『坂の上の雲』を書き終えた後の『草原の記』においては「明治二十年代、山県有朋は、朝鮮は日本の“利益線である”というふしぎな用語をつかった。むろん、そこから利益を得るという利益でなく、防衛上の利益を生むという意味のことばである。朝鮮が利益線であるという根拠あいまいな数式は、日本国民やその政府からうまれたというより、政府や議会から独立した機関である陸軍参謀本部からうまれた」と書き、1931年に起きた「いわゆる柳条湖事件を発端とする満州事変あたりから」は、このような「数式は拡大し、満州をもって国防上の生命線であるとするようになった」と指摘したのである^{*17}。

それゆえ、兵力不足のなかで奉天決戦の準備が行われている最中に、東京の参謀次長・長岡外史が、講和の前にロシアの領土のどこかをおさえてしまいたいという政略的意図から、「鴨緑江軍」を新設していたことにふれて司馬は、それは「戦争をもって一個の国家商売にしようとする思想」であるとし、「ロシアの侵略主義をふせぐべく立ちあがりながら、土俵の様子をみてそのロシアの侵略の果実を当方が逆にもぎとって、ついでにこの勢いを駆って、ロシアの

領土を侵略してしまえという考え方であった」と厳しく批判したのである（VI・「奉天へ」）。

しかも司馬は、「長岡程度の男が参謀本部長になれたのもかれが長州人であるおかげであつた」と記しているが、実際に陸軍の大御所である山県有朋たちは日露戦争の後も軍備の拡張をすすめる一方で、今度は満州の「門戸開放」を求めたアメリカやイギリスに対抗するために、それまでの敵の「帝政ロシアと手をむすんで、満州における利権を確保しようという方針」をとったのである。さらにはその帝政ロシアが革命で倒れると、今度は西欧の列強とともにシベリアへの出兵を行い、米英仏などが撤兵した後もなお2年近くも残って戦い続けた。

こうして日露戦争以降の日本の歩みをも視野に入れた司馬は、『ロシアについて』において、「君子ハ為サザルアリ、ということばがあるが、国家がなすべきでないことは、他人の領地を合併していたずらに勢力の大を誇ろうとすることだろう」とした。

そして、ロシアの満州への南下は「日本に近づくという恐怖」を起こさせ、「結局は日露戦争というかたちをとって爆発」したと指摘する一方で司馬は、1918年のシベリア出兵も「古風な表現でいえば流武の典型」であり、「国家的愚挙のはじまりであった」とし、シベリア出兵により、「建国のときにこの痛手をうけた」ソ連も、このときから「自国の革命を守るために過剰に武装するという体質」ができたことを指摘した。

実際、シベリア出兵についてはあまり日本では知られていないが、ロシア史の研究者・原輝之によれば、この出兵は「出兵方針について批判的な論評を加えること自体が発禁の対象」となるなどの厳しい言論弾圧のもとで行われていた。しかも朝鮮の「義兵闘争」を鎮圧した際に「暴徒討伐」という名目で行われていたのと同じようなことが、「過激派討伐」の名目で行われ、住民の銃殺や村全体の焼き払いさえも行われていたのである^{*18}。

さらに司馬は、1939年に起ったノモンハン事件の発端を、「モンゴルの騎兵数騎が、ハルハ川まで馬に水を飲ませにきたこと」を挑発とみた日本側が、「一個中隊の軽爆撃機をモンゴルの領内にまで飛ばし、モンゴル軍の包（パオ）二十個を爆撃してしまった」ためであるとした^{*19}。そして、この行為を「危険な火遊び」と断定した司馬は、「この事態は、モンゴル人民共和国の側からみれば、侵略というほかない」とし、このことがソ連に「すでに似たような張鼓峯事件をひきおこしている関東軍の奇妙な強気を徹底的にくじいておく攻略的必要」を感じさせたと記したのである。

それゆえ当初は福沢諭吉のアジア観を弁護していた司馬遼太郎も、1982年に口述した「役人道について」という論考では、「福沢が経た、時代のなかでの感受性というものを考えてやってもいい」とはしながらも、「『脱亜論』の内容については私は福沢に面憎さを感じてすきではありません」として、福沢が朝鮮を「亜細亜州中の一野蛮国」であり、「其文明の有様は我日本に及ばざること遠し」と断言し、中国についても「支那帝国は正に是歐米諸国人の田園なり。豈（あに）他人をして貴重なる田園を蹂躪せしむることあらんや」とし、日本の侵略を正当化したことに対して、「他民族とその文化への尊厳という感触は感じられません」と厳しい評価を下したのである^{*20}。

この意味で興味深いのは、比較文明学的な視点から、中国とモンゴルの関係を再考察した司馬が『草原の記』において、「文明圏である黄河人の服装」が、「寛やかで、活動的でなかった」

のに対して、野蛮人とされた匈奴の服装は「袖がほそく筒状で、長い脚衣をはき、ひざから下は長靴（ブーツ）」でおおっていたとし、「こんにちの洋服の源流をなしていた」と指摘していることである^{*21}。そして、司馬は「ヨーロッパ各国の陸軍が永く愛用」したいわゆる肋骨服が、アジア系のフン族の末裔である「ハンガリー騎兵の民族服」から取られ、「やがて日本にきて、たとえば日露戦争での第三軍司令官の乃木希典が着用している肋骨服にもなった」と記した。

比較文明学者の吉澤五郎は、「トインビー史観」と「司馬史観」の共通点に注目しながら、「司馬遷の『史記』は、なによりも中国の皇帝を世界の頂点にいだく、『天命史観』であるが、「中国を基点とする同心円の拡がりの中に、モンゴルの姿を見ることはできない」とし、一方司馬は、モンゴルの遊牧民にも「ひとしく文明の光をあて」ることで、「中国農耕民による歴史的な虚像と呪縛を解き放った」とした。そして吉澤は「司馬史観の本質的な意味と真価は、むしろ自ら筆名に仰いだ『司馬遷』との訣別と超克」にあり、それは「多様な『中心一周辺』文明の出会いと交流が織りなす新たな世界史像に向けた、文明学への旅立ちである」と結んでいる^{*22}。

実際、「辺境」のモンゴルまでも視野に入れて世界史を見直したことにより、司馬は「自国」を「華（文明）」と称して「攘夷」を正当化した「中華思想」の問題だけでなく、その反発から生まれた「皇国史観」や、戦争に明け暮れた近代の「西欧文明」を輸入した明治期の「文明開化」期の日本の思想の模倣性や皮相性にも鋭く迫り得ていたのである。

3. インドシナ半島における清仏戦争と「瘠我慢の説」の考察

司馬は『坂の上の雲』を書き終えた翌年の1973年にベトナム戦争末期のベトナムを訪れ、『人間の集団について』という紀行を書いた。ここで司馬は南ベトナムの傀儡政権がいずれは崩壊するとの見通しを立てつつも、ソ連や中国などの大国の援助を受けて、軍を近代化してアメリカと戦っている北ベトナムをも厳しく批判した。興味深いのは、このような司馬の考察が清国やロシア帝国が日本と朝鮮半島の覇権を争った日清・日露戦争や、フランスと清国がインドシナ半島での覇権を争った清仏戦争をも視野に入れていると思えることである。

すなわち、司馬はその冒頭で「四、五年前、『坂の上の雲』という小説について取材していたころ、このカムラン湾に行きたかった」と書き、「バルチック艦隊が、この湾に最後の休養と補給をもとめたが、英國の妨害とフランス官憲の困惑のために国際関係という荒波に漂わせられ、入港しては出港し、沖に漂泊し、あるいはこの湾の北方の無人湾に突入したりして、全艦隊の神経がへとへとなってしまうのだが、そのくだりを書くについて、ぜひこの湾の風景を知りたかった」とした司馬は、その後で「韓国とベトナムとは、たがいにその歴史も地理的環境も酷似している。似ているというより、ある意味では瓜二つといついい」と続けているのである^{*23}。

ところで、司馬は「日清戦争」の章ではフランスのベトナム侵略をも単に「帝国主義」の時代の戦争と規定していたが、福沢諭吉も清仏戦争について「國益」の視点から「仏蘭西の為を謀れば力を尽くして罪を支那に帰するの策」を講じるべきで、武力によってフランスが勝ちさえすれば、「仏人は世界万国に対して腕力に於て武勇者たるものみならず、道徳に於ても亦正義

者の名を博す可し」と述べていた^{*24}。つまり、福沢諭吉が依拠したバッカルなどの「国民国家史観」では、「国益」が重視されることにより、「文明」による「野蛮」の征伐が正当化されるとともに、自國の「国益」にかなわない「事実」は無視されるか、「事実」とは反対のことさえも主張されていたのである。

こうして福沢諭吉は、國家間の外交は「修身論に異なり」、「個人＝私人間のモラルは国家間においては適用されるべきではない」とし、「国家はたとえ過誤を犯しても容易に謝罪すべきではない」と強調してバッカル的な歴史観をより直截に展開したのである。

一方、『ひとびとの跫音』（1979～81年）において司馬は、「ながい船旅のあげくにパリについたとき」、フランスの新聞が自國の「政府が極東侵略（ベトナム支配や対清戦争）に熱中しているのを、連日、記事や銅版画で報じつづけていた」のを見て正岡子規の叔父の加藤恒忠（拓川）が憤慨したと書いている。そしてその理由を司馬は、この時期に故国日本では官憲が「沸騰する民権運動やその刊行物をおさえこむことで、気ぐるいしたようになって」、「新聞、出版に関する取締条例を強化し、さらには政論に関する集会を綿密に監視し、ささいなことでも解散を命じたり」するようになっていたことにも思いを巡らして、「国家や愛国ということの本質を、そこざらえにして考えざるをえなかつたのではないか」と記している。

つまり、「自己」（自民族、自國）を「文明」とし、「他者」（他民族、他国）を「野蛮」とすることで、「他国」への攻撃を正当化し、「ナショナリズム」を煽り立てながら、「国民」を戦争に駆り立ててきた近代的な「国民国家史観」の問題点に気づいた司馬はここで、「半島国家論」的な視点から大國フランスによるベトナムの占領を認めた福沢諭吉の歴史観を厳しく批判しているのである。

このような清仏戦争観の深まりには、福沢諭吉が勝海舟を厳しく批判した「瘠我慢の説」に対する考察の深まりがあると思われる。すなわち、日清戦争の数年前に書いた「瘠我慢の説」（1891年）において福沢諭吉は、「徳川幕府は衰えきっていたとはいえあのときなぜ瘠我慢を張って戦わなかったか。勝氏は『立國の要素たる瘠我慢の土風を傷（そこな）』った責任を感じなければならない」と主張し、「瘠我慢は立國の大本」であり「我日本武士の氣風」とし、「國家」を「維持保全せんとする者は、此主義に由らざるはなし」とした（F・X II、239～254）。

この時は発表されなかったこの論文は、日露戦争直前の1901年1月1日の『時事新報』に掲載されると、たいへんな反響をよんだ。研究者の西田毅によって紹介しておこう。「福沢諭吉の『瘠我慢の説』が発表せられるや、『瘠我慢』の土風維持の主張に世間の共感が集り、普段、『洋学紳士』、『抨金宗の大和尚』としての功利主義的発言に反発していた批評家のあいだから、『よし福澤全集は焼く可きも、此の一文は不朽なり』といった熱い支持が寄せられた」^{*25}。

このような中で、『国民新聞』の1月13日号に、「瘠我慢の説を読む」を発表し「勝弁護の一筆を揮った」のは、勝邸の一角に借家をし、勝の書斎にもたびたび出入りしていた徳富蘇峰であった。彼は福沢が「『後世士人の氣風を維持』せんがために、椽大の筆を揮った」、「その真意を理解するに咎かではない」が、勝が恐れた「その『眞の禍は、外国の干渉にあり』」とし、「小栗はフランスの力を借りて、『幕府統一の政』をなさんとし、薩長両藩は英國の援助で幕府に対抗せんとし、そしてロシアが両者の間隙を窺うという『其危機實に一髪』の状況下」にあ

った、「幕末維新期における亡国の危機的状況」を指摘し、勝の行動の結果生じた事態を「是れ實に意外の僥倖」ではなかったかと述べたのである。

さらに、蘇峰は「福沢は勝の挙動を以て、武士の風上にも置かれぬとするが」、日清戦争のときの『挙国一致の主唱者』は、他ならぬ福沢その人であったこと」をあげて、「『吾人は福沢氏の論理は、其の題目の人物如何によりて勝手に変化するの、頗る奇異なるを覚えずんばあらず』」と手厳しく批判したのである。

これに対して福沢諭吉は、蘇峰が「幕末外交の真相を詳にせざるが為に、折角の評論も全く事實に適せずして、徒に一篇の空文字を成したるに過ぎず」と冷淡に反論した（平山洋の説に従えば、この反論も石河が書いた可能性がある）。西田は「『外国干渉』という事實認識は、両者のあいだでこのような差があるが」、「管見のかぎりでは、蘇峰がこの点に関して再反論の筆を取ったという事實を知らない」と結んでいるが、この年に福沢諭吉が亡くなったことや明治末期の「福沢ルネサンス」の中で、蘇峰は沈黙を守ったのである。

一方、この福沢諭吉の文章について1976年から書き始めた『胡蝶の夢』の前半で司馬は、「政治と倫理のかかわりを説いた論文としては、明治期もしくはそのちにいたっても、これを越えるものはすくない」と絶賛し、「立国は私なり、公に非ざるなり」からはじまるこの文章は、「抑制された感情がかえって密度を高くしている点、福沢の他の文章とは別趣の観さえある」として、この論文を個人の自立をうながしたものとして高く評価した（I・「はるかな海」）。

しかし、『胡蝶の夢』において勝海舟についても詳しく考察していた司馬は、後には「私は、この福沢の勝論には与（くみ）」しないと断じて、「勝の幕府始末は命を張った実務家のもので、福沢は勝の事歴のこの部分を衝くかぎりにおいては、口舌の徒のにおいがしきりにする」とまで記した^{*26}。

このような変化の根底には、『坂の上の雲』で行った「半島国家」ベトナムの再考察があると思われる。すなわち、バルチック艦隊のカムラン湾寄港にふれて、司馬は『坂の上の雲』のこの章で「日露戦争のこの時期よりも百二十年ばかり前（日本の天明期）フランス人宣教師がこの地に政治的関心をもち、阮福映（グエン・フォック・アニュ）という統一的野心をもった英雄を支援し、やがてフランスの後援によるベトナム統一を遂げしめ、それによってベトナムにおける特権的地位を占めた」とベトナム史にも言及していたのである。

そして司馬はベトナム史と日本史との比較を行って、「幕末、フランスは徳川幕府を徹底的に支援した。とくに小栗上野介を抱きこんで、新国家の構想をあたえた。…中略…小栗はその構想の信徒になった。この時期までは、フランス構想は成功するかにみえたが、結局は政敵の勝海舟の反対運動のために挫折し」、「日本はベトナムの悲劇をまぬがれた」と続けた（VII・「東へ」）。

つまり、「勝邸内に居住し」、親しく交際して幕末の状況を詳しく知っていたはずの蘇峰は、福沢諭吉からの反論に遭遇すると口を閉ざしてしまったが、司馬は「外国の干渉」についての記述では、蘇峰の批判が正しかったことを明らかにしているのである。

しかも問題は福沢諭吉が「瘠我慢の説」で、かつては復古思想として厳しく批判していた

「忠君愛國」の思想を、哲学的な理想論から見れば「公道」ではなく「私情」であるとしながらも、西欧「列強」と互いに存亡を賭けて戦っているような厳しい国際関係においては、国の独立を目指すためには「忠君愛國」を「公道」ということもやむを得ないとして、受け身的とはいえた思想を認めていたことである。

これに対して蘇峰は、「『瘠我慢』の大切さを認識する点では『福沢氏と二論ない』」しながらも、「聰明、先見、常識、思慮と結びつかない『瘠我慢』の精神が、国家社会に出現するとき、往々にして、『頑迷、固陋なる攘夷的精神』に昇華する危険性は、隣国の『義和団の乱』をみてもわかる」として、「瘠我慢」の精神が「固陋なる攘夷的精神」に変化する危険性をも鋭く指摘していた^{*27}。

しかし、福沢諭吉の反論に遭うとこの件では沈黙した蘇峰は、福沢諭吉が「瘠我慢の説」で受動的に認めた「忠君愛國」の思想を積極的に受け継ぎ体系化して、自分は「大正青年に愛国心の押売を試み」ようとするものではないと断りつつも、「錦旗の下に於て、一死を遂ぐるは、日本国民の本望たる覚悟を要す。吾人は此の忠君愛国教育に就ては、日本歴史の教訓に、最も重きを措かんことを望まざるを得ず」と主張するようになる^{*28}。

さらに敗戦の色が濃くなった「大東亜戦争」の末期の1945年に、「大東亜聖戦の開始以来、わが国民は再び尊皇攘夷の真意義を玩味するを得た」とした蘇峰は、「我が神聖固有の道を信じ、被髪・脱刀等の醜態、決して致しまじく」との誓約の下に団結して立ちあがった神風連（じんぷうれん）の乱を、「歐米化に対する一大抗議であった」とし、「この意味から見れば、彼らは頑冥・固陋（がんめいこうろ）でなく、むしろ先見の明ありしといわねばならぬ」として、「神風連」の精神を高く評価するようになったのである^{*29}。

一方、『龍馬がゆく』において、幕末の「神国思想は、明治になってからもなお脈々と生きつづけて熊本で神風連の騒ぎをおこし、国定国史教科書の史観」となったと痛烈に批判していた司馬は、『「昭和」という国家』において「統帥権を握った者たちは、その果てにどこに行くかわからないほどの野望を持った」とし、うまくいかなくなると、「統帥権の執行者自身がヒステリーになって、たれかをスケープゴートにして」、「おまえがだらしがないんだしてしまう」と指摘し、「国民はぜいたくしているかいなかと、よく言われました」が、それは「いじめているわけですね」と書いたのである。

実際、福沢諭吉はここで「国家存亡の危急にありて勝算の有無は言う可き限りに非ず」と記していたが、日清・日露の両戦争に勝ち抜いた日本政府は、庶民には「欲しがりません勝つまでは」とのスローガンで瘠我慢を強いつつ、勝算のない太平洋戦争へと突入することになったのである。つまり、福沢諭吉を「口舌の徒」とまで言い切ったとき、司馬は自分の「立身出世」の追求に忙しかった高級官僚たちが、「義勇奉公とか滅私奉公」などという「公」を名目とした言葉で、民衆に対して犠牲や痛みを強いることになった思想の原型を、「瘠我慢の説」に見いだしていたとさえ思えるのである。

4. 「列強」との戦争と「共栄圏」の思想——バルカン半島の霸権をめぐる戦争の考察

しかも「自国」を神国視して「鬼畜米英」との戦いに踏み切った「大東亜戦争」に際しては、

瘠我慢が強いられただけではなく、『日本書紀』の「八紘一宇（はっこういちう）」に基づく「大東亜共栄圏」の理念も高らかに唱えられた。たとえば、真珠湾の攻撃後に行われた知識人たちによる座談会では、近代ヨーロッパにおける文化や歴史の「発展段階説」を批判する一方で、「大東亜共栄圏の倫理性」については「新しい理念の下に、非常に多くの民族を一つに統合した共栄圏というような形のものは、過去の世界の歴史の中で恐らく考えられたこともないだろう。単なる個人々々の平等を考えるというような意味の理想は過去に於て抱かれたことはあるけれども、いろいろな民族をして所を得しめてくる、というような理想は從来西洋に於てはなかったんじゃないかな」と語っていたのである^{*30}。

しかし、西欧列強との対決が強く意識される中で、自国を盟主とする「共栄圏」の理念が、日本帝国だけではなくロシア帝国においてもすでに生まれていた。つまり、まだ『坂の上の雲』の執筆の時点では司馬はあまり深く認識していなかったものの、ロシアの側から見ると、クリミア戦争はトルコの支配下で苦しむバルカン半島の同じスラヴ人の正教徒を解放するための戦争という名目を有していた。

たとえば、初めは熱烈な「西欧派」の論客として出発し、憲法もなく厳しい言論の弾圧が行われていた「帝政ロシア」の状況を批判して捕らえられたダニレフスキイは、クリミア戦争の後では、西欧の「二重基準」への強い怒りから「国粹派」の論客に変化していたのである。

すなわち、彼は1869年に連載した『ロシアとヨーロッパ——スラヴ世界のゲルマン・ローマ世界にたいする文化的および政治的諸関係の概観』という論考の第一章ではクリミア戦争はこの前年に叔父のナポレオン一世の権威を背景にして即位していたナポレオン3世によって起こされたものであり、彼にとってこの戦争は「ナポレオン王朝を不信と悪意をもって見ているヨーロッパと和解させる」ために必要であったことを強調した^{*31}。

実際、歴史家の倉持俊一の記述によれば、クリミア戦争の「直接の発端となったのは、フランス皇帝ナポレオン3世が、国内のカトリック勢力の歓心を買うために、聖地エルサレムにおけるカトリック教徒の特権をトルコに認めさせたことであった」。これに対して「ロシア皇帝ニコライ1世は、そのために失われたギリシア正教徒の権利の回復を要求」して、これを拒否されると、トルコ支配下のギリシア正教の同胞を助けると唱えてバルカン半島に出兵して、ロシアとトルコの間で戦争が始まり、ロシアは有利に戦争を進めたが、ロシアがバルカン半島での霸権を確立することを恐れたイギリスとフランスが、トルコ側に参戦すると力関係が逆転したのである^{*32}。

つまりロシアの側からみるとギリシャ正教を受容したスラヴの諸民族をイスラム国のトルコの占領下から解放しようとしたことに対して、キリスト教国である西欧の列強がトルコの側にまわったことは、ロシア人の激しい怒りを呼び起したのである。

それゆえ、「なぜヨーロッパはロシアを憎むのか」と題された第二章では、1812年のナポレオンによるモスクワ侵攻はヨーロッパの利益をロシアが守ろうとしたために起きたのだと主張する一方で、ポーランドの分割や二月革命以後のハンガリー出兵の際には、オーストリアやプロシアなど西欧の諸国も関わっていたにもかかわらず、ロシアのみがその反動性を強く非難されていると力説されたのである。

そしてダニレフスキイはヨーロッパがギリシア正教を受容したロシアを自分たちの同胞と見なしていないために、ここでは不公平な「二重基準」が用いられると批判し、「ダーウィン」の進化論を歪めた弱肉強食の思想を正当化する西欧列強から滅ぼされないためには、「祖國戦争」でヨーロッパを救ったロシアを盟主とする「全スラヴ同盟」を結成して対抗すべきだと強調したのである^{*33}。このようなダニレフスキイの論理は、「米英の不遜横暴」を批判しつつ、「封建体制から急速に国民国家の体制」に変わることができた日本の指導性を強調した「大東亜共栄圏」の理念と驚くほどに似ているといえよう。

しかも、露土戦争でのロシアの勝利とその後に起きた「列強国」による干渉は、日清戦争後の「三国干渉」ともきわめて似た様相を示しているだけでなく、この問題は第一次世界大戦や、司馬が言及することになるユーゴスラヴィアの内戦やイラク戦争の問題にもつながることになるので、少し詳しく見ておきたい。

イギリスやフランスの参戦によってクリミア戦争では敗北したものの、初期のトルコとの戦争でロシア軍が勝利していたことで、これらの地域では独立運動が盛んとなり、1875年6月には「バルカン半島の一角ヘルツェゴヴィナで突如反乱がおこり、八月にはボスニアにも拡大し」、翌年4月には「ブルガリアの正教徒が反乱を起こし」、厳しく鎮圧されると今度はセルビアとモンテネグロがトルコに宣戦を布告した^{*34}。

この戦いではセルビア軍が大敗して休戦にいたったが、列強国はバルカン半島における改革をトルコに要求し、この勧告が拒否されると「ロシアはついにトルコに宣戦を布告した」。しかもこの時、「アレクサンドル二世はこの戦争の目的を『トルコ国内の抑圧されたキリスト教徒の状態を改善し、保護する』ことにあると宣言した」のである。

この戦争がロシアの勝利に終わると1878年3月にサン=ステファノ条約が結ばれ、「ロシアはルーマニア領ベッサラビアおよび黒海東南岸のトルコ領を獲得し」、「セルビア・モンテネグロ・ルーマニアは独立し、ボスニアとヘルツェゴヴィナにおいては、コンスタンチノープル会議が提案した改革がただちに実施され」、さらに、「黒海からエーゲ海にまたがるブルガリア公国が建設され、キリスト教徒の自治と国民軍を備えた政府がつくられることとなった」。

しかし、バルカン半島におけるロシアの影響力が強まることを恐れた西欧の列強は、今度はロシアの影響力をそぐために、ビスマルクを議長とするベルリン会議を開いて、「列強の力の均衡」をはかり、その結果ボスニアとヘルツェゴヴィナはオーストリアによって支配されることになった。すなわち、「三国干渉」に対して『時事新報』は、「単に口舌の力を以て、寸兵を動かさずして、幾千里の土地を得たる」ことは、「古今の歴史にも希（ま）れなる新筆法」であると記してロシアを批判していたが、日清戦争の直前にオーストリアはバルカン半島で、「寸兵を動かさずして」多くの領土を手に入れており、ロシアはその「被害」を受けていたのである。

それゆえ、ロシアの世論は「この会議を、外交上の敗北」と受け取り、汎スラヴ主義者の中には、「この会議をもってロシアの恥辱と考え、戦争の継続すら主張する者」も出てきた。他方、ロシアの新聞から激しく非難されたビスマルクは、ドイツの孤立化を恐れて1879年にひそかにオーストリアとの同盟を締結したが、1918年まで続いたこの同盟は、「ヨーロッパの諸勢

力を二大陣営に分け、第一次大戦の舞台を準備するところとなったのである。すなわち、一方的にオーストリアに併合された地域では、独立運動がその後も続いていたが、1914年にボスニアでオーストリア皇太子夫妻が暗殺され、セルビアへの宣戦布告がなされると、ロシアも参戦して第一次世界大戦が始まったのである。

さらにソ連崩壊後に国際秩序の再編成が行われる中でボスニア・ヘルツェゴビナでは、正教徒・カトリック教徒・イスラム教との三者による激しい内戦が起きたが、1994年に行われた梅棹忠夫との対談でこの問題を論じた司馬は、「民族問題は結局、恨みなのです」という梅棹の言葉を受けて、「日本の悪しき朝鮮支配は36年間でした。日本人にとってはたった36年間ですが、韓国人にとっては3000年くらいに当たるわけでしょう」と述べている^{*35}。

ボスニアの問題を論じている対談で、司馬が急に朝鮮に話題を移していることは、一見、不思議に見えるかもしれない。しかし、司馬が「半島国家」という視点から『坂の上の雲』で、朝鮮問題を論じていたことを思い起こすならば、これは意外ではない。

一方、梅棹も日清戦争後の日本の臥薪嘗胆などを想起しつつ、「これは民族問題特有の現象ですが、逆に恨みが内部の結束に転用される。つまり異民族を敵視することで、自民族の結束を図るということ」があちこちで起こっていると指摘し、司馬もこの言葉を受けて、「政治技術として、恨みを使ったり、再生産したりするようですね」とし、「セルビア人やクロアチア人の場合も、指導者たちは多分にそういう技術を使っているのでしょう」と述べたのである。

この意味で注目したいのは、日本の近代化の過程を分析した梅棹忠夫が、「ヨーロッパ列強の圧力に対抗して近代化」を迫られた「アジアの他の国々に」や「アフリカや中東」でも、「国民国家の建設と、ミニ帝国の建設とが、同時平行的にからまりあって進展していた」と指摘していることである^{*36}。このような梅棹の指摘を考慮するとき、イランとの戦争に際してはアメリカの「同盟国」として援助を受け軍事大国となったイラクが、さらなる領土を求めてケウェートに侵攻して厳しい批判にさらされると、今度は「イスラームの団結」を呼びかけたことも、「日本帝国」や「ロシア帝国」がたどった軌跡に重なってくるのである。

たとえば司馬は、真珠湾の攻撃を「太平洋戦争の開幕のときの不意打ちによって、日本のインテリは溜飲を下げた」が、「それは嘘の下がり方なんです」と『「昭和」という国家』において厳しく批判していたが^{*37}、実際、英米に対する「総力戦」の意義や「近代の超克」をめぐって語られた先の座談会では、「ハワイの奇襲作戦でも、表面に現れた形は奇襲に違いないが、練りに練った揚句の捨身なんだろう。無論その時の思いつきなんてものではない。慎重な計画と厳格な訓練とがその背後にあるんだ。大東亜戦の全体からのつむきならない必然性がある素晴らしい創意を産んだのだ」とその奇襲が高く評価されていたのである^{*38}。

しかもこれに対する「文明国」の側の対応もきわめて似ている。それまでイランに対抗するためにイラクの軍事大国化を応援していたアメリカは一転してフセインを糾弾して、ついには戦争に踏み切ったのである。一方、湾岸戦争が勃発して「国際貢献の是非をめぐって」日本が揺れていたころに司馬は、後輩の青木彰への手紙で、フセインを激しく批判しつつも、戦争という手段で「世界が成功したことがない」と続け、「すかさず拳銃を抜いたアメリカも、西部劇的幻想がありすぎる」と記していたのである^{*39}。

こうして司馬は、大国の周辺に位置する半島を、「大国」の力に従うべきとしていた地政学的な見方から脱却して、「文明」を伝えるための戦争を「正義の戦争」とし、これに反対して自国の伝統を守ろうとする抵抗運動への厳しい弾圧を過激派への掃討作戦として正当化してきた近代の戦争観を厳しく批判しているのである。

このような司馬の観点からすると、原子爆弾の投下を当時の日本は「野蛮」だったとして「自国」を正当化してきた「大国」アメリカが、今度はブッシュ・ドクトリンのもとで「ならず者国家」に対する劣化ウラン弾などの攻撃だけでなく、小型核兵器による先制攻撃の権利をも有するとも宣言していることは、「報復の戦争」を繰り返してきた古い危険な「自国中心史観」への退歩であると批判されるべきであろう。

5. 『韃靼疾風録』——新しい文明観と東アジアの共生の可能性

この意味で興味深いのは、唐に留学した空海の一生を考察した、『空海の風景』(1973~75年)において長安を「東西文明の交流点」と位置づけた司馬が、この長編小説を執筆中の1974年に書いたエッセー「自己と相手への認識」において、比較文明学的な視点から「中国文明」とその「周辺」諸国との関係についての見直しをはじめていることである^{*40}。

まず注目したいのは、司馬がここでは「文明というのはどの民族にも適用しうる普遍性を持つものだが、そういう意味での文明を興した民族は数多くなく、日本史的立場からいえば中国民族をもって筆頭にあげねばならない」と、かつて日本に「文明」をもたらした中国を高く評価していることである。そして司馬は、中国における近代化の難しさについても、「文明を興した」民族の場合は、「自分が興した文明を他のものと交換すること」が難しいために、「ときに民族的衰弱を来たすという深刻さがある」と説明し、一方「周辺民族」においては自分独自の文化さえ持てばよかったので、「時勢の必要に応じて他の文明を仕入れることが容易」であり、ヨーロッパ文明も抵抗無く仕入れることができたと続けた。

すなわち、西欧を「文明」とした福沢諭吉は、日本が「開国20年の間に、200年の事を成した」と書いて「文明開化」の速度を誇ったが（F・IV・326）、これに対して司馬は、日本の近代化の速度を「周辺文化のみを持っていたために身軽であった」ためと厳しく規定したのである。

司馬の親友だった梅棹忠夫が、「これは、彼のもっているアジアに対する愛情と知識がドッと吹いて出たような、おもしろい作品です。じつによく調べている」と高く評価した長編歴史小説『韃靼疾風録』を司馬が書いたのは、1984年から87年にかけてのことであった^{*41}。これは江戸幕府成立後のまもない時期に、平戸島に漂着した韃靼公主のアビアをその故国におくりとどけることになった創作上の人物である桂庄助の物語であるが、教育学者の遠藤芳信もこの時期が「中国では、明王朝はしだいに衰退し、やがて、中国東北地域から胎動した韃靼（女真。後金を名乗り、のちに清王朝を樹立）にとってかわられる」、「東アジア世界の転換期にある」と指摘し、これは国や民族、国境などの意味を問いかける「スケールの大きい歴史小説である」と位置づけている^{*42}。

この意味で注目したいのは、司馬が『坂の上の雲』で奉天における日露の大会戦を描く前に、かつては瀋陽とよばれていた奉天を、「満州から興った固有満州人（ツンガース）の一首領の

愛新覚羅ヌルハチ（清の太祖）がこれを攻め、その政都にし」たが、徳川三代將軍家光の時の1644年に、台風に遭つて満州に流された漂流民が、つかまって護送されてゆく途中にこの都会を見たと書いていることである。エカテリーナ2世の頃にロシアに漂着した大黒屋光太夫の異文化体験を描いた井上靖の『おろしや国酔夢譚』を高く評価し、『モンゴル紀行』においても大黒屋光太夫に言及していた司馬遼太郎は、この談話筆記に興味をもち、それが大作『韃靼疾風録』につながったのである^{*43}。

しかも司馬はここで登場人物の一人に「大明國に打入るとして朝鮮國」に攻め込んだ秀吉の「朝鮮征伐」の「惨禍は彼の国においてもつともはなはだし」かったと説明させ、その結果、日本に対する「憎悪と不信」が高まり、「たれひとり日本國の者を人として」は見ないようになっていると語らせている（上・「だったん公主」）。しかも司馬は後に清國を建国することになる女真族と日本との関係だけでなく、今も勢力を保つ「文明國」の明國と、新興の「韃靼」という「強大な軍事力をもつたつの勢力から恫喝されている」朝鮮の苦しい立場をも詳しく描いているのである（上・「禍」）。

そして1983年の陳舜臣との対談で、「民族論や国家論だけのレベルで他の国をみると、ずっと失敗してきた」と語るとともに、「自分の特殊なものに隠れていくときに、一番甘美になる」と指摘して「日本回帰」を批判し、「普遍性を身につけることの大しさ」を強調していた司馬は^{*44}、この長編小説の最後で苦難の末に主人公たちが故郷に到着したときには、江戸幕府が鎖国政策をとるようになり、日本人の帰国を禁止していたために、主人公の桂庄助が家族とともに「明國」の者として入国したと書いている。こうして司馬は、「日本人」である庄助を国境を越えた普遍的な価値を理解している者として描くことに成功したのである。

むろん、庄助は創作上の人物ではあるが、しかし、司馬は江戸時代の実在の商人を描いた長編小説『菜の花の沖』で、主人公の高田屋嘉兵衛に日本とロシアの軍制の違いについて「日本の場合、どういう怨みがあっても、自国を固めることはあっても、不法に他国を攻めるようなことがない」と語らせ、このように言えたのは、「江戸期の日本だったればこそであったろう」と続けていた（VI・「カムチャツカ」）。

そして、司馬は江戸時代などについての豊富な知識を踏まえて、未来の地球文明のモデルとなりうるような「普遍」としての「平和」の理念が、「鎖国」という状況下ではありながらも、「中国文明」の影響から脱し、諸藩が多様性を有して、独自な文化を生み出した江戸後期の日本にあり、それが明治以降の日本で受け継がれてきたことを具体的に明らかにしたのである。

そして、「自国」を「公」とし、「野蛮」とみなした「他国」に対する戦争を正当化してきた近代の歴史とその悲惨さを凝視し続けてきた司馬は、「『文明』というものは海外からくるものだと、日本人は思っているところがある」が、しかしこれからは「文明」や「思想」を、日本は「自分で内から興さなければいけない」時期にきていると対談で述べるのである^{*45}。それゆえ、「江戸時代回帰にはもう逃げ込めない。といったん明治元年に国家として出航してしまった以上、我々は常に次なる目標を考えなければいけない」とも記した司馬は^{*46}、戦後に出来た平和憲法のほうが「昔なりの日本の慣習」に「なじんでいる感じ」であるので、「せっかくの理想の旗をもう少しつきりさせましょう」と語り、「日本が特殊の国なら、他の国にもそれも

及ぼせばいいのではないかと思います」と続けたのである^{*47}。

地球の温暖化など地球規模の問題を解決するためにも、日本はいまこそ「自国の正義」を主張しつつ戦争によって問題を解決しようとする19世紀的な古い世界観を批判して、「地球」を「公」とし、「平和」を普遍的な理念とするような「新しい文明観」を世界へと発信すべきときに来ていると思われる。

註

- *1 司馬遼太郎『モンゴル紀行』(『街道をゆく』第5巻)、朝日文庫、1978年、10頁
- *2 司馬遼太郎・上田正昭・金達寿『日本の朝鮮文化』中公文庫、1982年、25頁。なお、司馬は『韓のくに紀行』において、「この稿では民族の名称として朝鮮人というぐあいにいきます」と断っているので(13頁)、本稿でもそれに準じる。
- *3 梅棹忠夫『近代世界における日本文明——比較文明学序説』中央公論社、2000年
- *4 司馬遼太郎『韓のくに紀行』朝日文庫、1978年、53頁
- *5 半島国家の問題については、東海大学文明学会第22回大会で本論の骨格を発表した。
- *6 高橋「司馬遼太郎の福沢諭吉観——『公』の概念をめぐって」『文明研究』第22巻、2004年。
「『司馬史観』の深化と比較文明学——『坂の上の雲』から『菜の花の沖』へ」『比較文明研究』第10号、2005年。
- *7 本稿は東海大学エクステンションセンターで行った市民講座「司馬遼太郎のアジア観」の講義用原稿に、伊東俊太郎・国際比較文明学会名誉会長との対談(「司馬遼太郎の『平和観』をめぐって」『望星』2005年8月号、66~71頁)などでの考察を踏まえて、大幅な改訂を加えたものである。
- *8 福沢諭吉『福沢諭吉選集』第10巻、岩波書店、1981年、187頁(以下、この選集をFと略し、引用箇所は本文中に巻数はローマ数字で、頁数は算用数字で示す)。
- *9 Bokl', Istorya tsivilizatsii v Anglii, Spb., 1896, vol.1., pp.75-78 なお高橋『欧化と国粹——日露の「文明開化」とドストエフスキイ』刀水書房、2002年、第1章参照
- *10 司馬遼太郎の長編小説からの引用箇所については、煩雑さを避けるために、本文中に章の題名と作品名を示し、巻数はローマ数字で記す。
- *11 Dostoevsky, F.M. Polnoe sobranie sochinenii v tridtsati tomakh, Leningrad, Nauka, vol.5., p.112
訳は江川卓訳、『地下室の手記』新潮文庫、昭和44年によった。
なお、R.Peace,Dostoevsky's Notes from Underground,Bristol Classical Press, 1993参照。
- *12 安川寿之輔『福沢諭吉のアジア認識——日本近代史像をとらえ返す』高文社、2000年。司馬批判については、46頁、47頁、164頁参照
- *13 井田進也『歴史とテキスト——西鶴から諭吉まで』光芒社、2001年参照
- *14 平川洋『福沢諭吉の真実』文春新書、2004年、147~162頁
- *15 同上、178頁
- *16 司馬遼太郎『司馬遼太郎が考えたこと』第6巻、新潮社、2005年、290頁

- *17 司馬遼太郎『草原の記』新潮文庫、1995年、127～130頁
- *18 原輝之『シベリア出兵——革命と干渉1917—1922』筑摩書房、1989年、418～470頁
- *19 司馬遼太郎『モンゴル紀行』朝日文庫、1978年、119～120頁
- *20 司馬遼太郎『この国のかたち』第6巻、文春文庫、2000年、211～2頁
- *21 司馬遼太郎、前掲書（『草原の記』）、31頁
- *22 吉澤五郎「司馬遼太郎と旅の文明学」『異文化交流』第6号、2005年。なお、本稿の作成に際しては、『異文化交流』第3号や第6号所収の司馬遼太郎論も参考にした。
- *23 司馬遼太郎『人間の集団について——ベトナムから考える』中公文庫、11頁、24頁
- *24 松永昌三『福沢諭吉と中江兆民』中公新書、2001年、147～8頁
- *25 西田毅「精神史的に見た徳富蘇峰と福沢諭吉——『瘠我慢の説』をめぐって」『近代日本と徳富兄弟』、財団法人蘇峰会、2003年、15頁
- *26 司馬遼太郎『「明治」という国家』上、NHK出版、1994年、56～7頁
- *27 西田毅、前掲書、17頁、21頁
- *28 徳富蘇峰『徳富蘇峰集』筑摩書房、1978年、319頁
- *29 徳富蘇峰『近世日本国民史』（『西南の役（2）——神風連の事変史』）講談社学術文庫、1980年、327頁
- *30 高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高『世界史的立場と日本』中央公論社、1943年、35～6頁、231～2頁
- *31 Danilevsky,N.Ya.,Rossiya i Evropa,izd. Glagol i izd. S-Peterburgskogo universiteta, SPb., 1995,pp.10-16
- *32 『世界大辞典』、倉持俊一、平凡社
- *33 Danilevsky,N.Ya.,ibid. p.153
- *34 岩間徹『ロシア史』、山川出版社、1993年、360頁
- *35 梅棹忠夫編著『日本の未来へ』NHK出版、1994年、77頁
- *36 梅棹忠夫『近代世界における日本文明——比較文明学序説』中央公論社、2000年、342頁
- *37 司馬遼太郎『「昭和」という国家』NHK出版、1998年、129～130頁
- *38 高坂正顕・西谷啓治・高山岩男・鈴木成高、前掲書、438頁
- *39 司馬遼太郎『司馬遼太郎からの手紙』下巻、朝日文庫、2004年、73頁
- *40 『司馬遼太郎が考えたこと』第7巻、新潮社、2005年、269頁
- *41 梅棹忠夫「司馬遼太郎への誘い」「司馬遼太郎がわかる」、エラムック、2000年、6頁
- *42 遠藤芳信『海を超える司馬遼太郎——東アジア世界に生きる「在日日本人」』、フォーラム・A、1998年、69～70頁
- *43 司馬遼太郎『韃靼疾風録』中公文庫、1991年、上巻、346頁、下巻、113～4頁、388～9頁、および文庫版へのあとがき参照。
- *44 司馬遼太郎・陳舜臣『中国を考える』文春文庫、1983年、127～130頁
- *45 司馬遼太郎・朝尾直弘『司馬遼太郎 歴史歎談』中央公論新社、1991年、290～5頁
- *46 司馬遼太郎『この国のかたち』第4巻、1997年、262～3頁
- *47 司馬遼太郎・井上ひさし『国家・宗教・日本人』講談社、1996年、132～3頁